

2019 年度 教育 研究 活動 報告 用 紙 (様式 9)

氏名 前田 幸	職名 講師	学位 助産修士 (専門職) 天使大学 2006 年
---------	-------	---------------------------

研 究 分 野	研究内容のキーワード
助産学、母性看護学	助産ケア、助産師外来、バースレビュー、子育て支援 保健指導、助産 (師) 学生、分娩介助、乳がん検診

研 究 課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・分娩体験におけるバースレビューの意義や役割について考察する ・妊娠期からの胎児へのコミュニケーションが愛着に与える影響について考察する ・助産師学生の分娩介助の習得過程に関して考察する ・乳がん検診・自己触診法の啓発活動を通しての学生の学びについて考察する

担 当 授 業 科 目
<p>【助産別科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助産診断・ケア学Ⅰ 妊娠期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅲ 産褥期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅴ 周産期のハイリスク (前期) ・助産診断・ケア学Ⅶ 助産過程演習 (前期) ・助産学研究演習 (通年) ・実習：助産学基礎実習 (前期) <p>助産学実習Ⅰ・助産学実習Ⅱ・助産管理実習 (後期)</p> <p>【看護学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母性看護方法論 (2年後期) ・母性看護学演習 (3年前期) ・母性看護学実習 (3年後期～4年前期) <ul style="list-style-type: none"> ・助産診断・ケア学Ⅱ 分娩期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅳ 新生児・乳幼児期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅵ 健康教育演習 (前期) ・女性の健康支援 (前期) ・基礎助産学Ⅱ (前期) ・ウイメンズヘルス看護論 (3年前期)

授業を行う上で工夫した事項 (※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【助産診断・ケア学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ】</p> <p>助産診断・ケア学では、各領域の基礎的知識及び助産技術習得ができるように、事前課題やワークシートなどを用い、学生自身が主体的に自ら考え、意欲・関心が得られるように、工夫した。グループディスカッションや発表を取り入れるなど学生同士の学びの共有ができる工夫を行った。演習においては、学習で得た知識を統合させ、助産ケアの実践につながるよう、担当教員とともにデモンストレーションの工夫を行い、また、実習で体験する場面やケアなどを取り入れていった。また、最新のガイドラインなどを意識した演習を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 助産診断・ケア学Ⅰ (妊娠期) では、演習内容を事前に提示し、自己学習を行った上で臨むようにした。実習において、必須である妊婦健診や保健指導に伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、演習内容に妊婦と助産師役、第3者の視点も含めロールプレイを行い、ケアに結び付けられるよう演習を組み立て取り組んだ。また、演習後は、観察したことをアセスメントし、体験を通して考えたこともふまえレポートにて振り返る機会をもった。 2. 助産診断・ケア学Ⅱ (分娩期) では、前半は主に分娩期の生理・分娩経過に伴う産婦や胎児の変化、支援方法についての講義を行った。学生自身が自ら考え、意欲・関心が持てるようにDVD視聴や模型を使用し、グループごとに主体的に考える機会を取り入れるなど工夫した。後半は主に演習を行った。演習内容を事前に提示し、自己学習を行ったうえで臨むようにした。産婦人科ガイドラインや助産業務ガイドラインを中心に臨床での基準に沿って、また科学的根拠を持って、技術を実践できるよう意識づ

けを行った。

実習において、必須である分娩介助やそれに伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、事例を用いての演習を組み立てて取り組んだ。

授業科目名【助産学基礎実習】

実習目標の到達に沿って、基本的な助産技術の習得および助産過程の展開ができるように学生の支援を行った。特に基礎実習では、対象者を捉えることからはじめ、母子の安全を考え、また科学的根拠に基づいたケアを学生が提供できるように関わった。学生個々の価値観等を考えながら、臨床指導者や他の教員と意見交換し、支援するとともに、学生の実習に対して、助産ケアに関して、フィジカルアセスメントを考えたうえで、今後どのようなことが予測されるか、対象者に今必要なケアは何か、学習で得た知識を活用し、考えることができるようにフィードバックを行った。

授業科目名【助産学実習Ⅰ・Ⅱ・管理】

実習目標の到達に沿って、助産技術の習得および助産過程の展開ができるように、学生の支援を行った。特に助産学実習Ⅰ・Ⅱでは学生が対象者や家族を多角的に捉え、気づき、対象者に寄り添ったケアを提供できるように意識して関わった。また正常経過と逸脱経過の判断を行いながら、倫理的視点を常に持ち、ケアを行えるよう助言等の工夫をした。臨床指導者や他の教員と連携をとり、意見交換し、支援するとともに、学生がより個別性を考えたケアを行うことができるように工夫してフィードバックを行った。また、正常からの逸脱の事例を経験した学生には、1つ1つの場面やケアの振り返りを行う機会を持つとともに、グループ間での情報共有やディスカッションを通し、より客観的に学びを共有することができるよう支援した。

授業科目名【母性看護方法論】

今年度は、産褥期と新生児期を担当した。学生が母性看護学に興味を持てるよう、また主体的に学習ができるように、事前に予習プリントを配布し講義をすすめた。また、講義の中でワークシートを用いた学習や小テストなどを取り入れ、学生自身が知識の習得状況を確認できる機会を設けた。事例や周産期の現場で起こりうること、看護者としての考え方や対象者とのかかわり方、また学生自身の身体と結び付けるような情報を講義で紹介し、学生が教科書の知識と結び付けてイメージしやすいように工夫を行った。

授業科目名【母性看護学演習・実習】

演習では、実習を考慮し、看護過程と看護技術習得が行えるように関わっていった。今年度は、演習で小グループでの活動を取り入れ、学生同士が主体的に学び合う機会を設けた。各小グループの担当教員が主にサポートとして関わった。

実習に関しては、看護過程の展開を通し、学生個々に合わせたフィードバックを行うことで実習目標の到達できるように関わっていった。ケアの実施の際には、科学的根拠を考えて実施していくことの必要性を伝えていった。実習を通して周産期におけるケアや退院した後の継続ケアを理解できるような支援を行った。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等（任期）	加入時期
日本看護協会 日本助産学会 母性衛生学会		2003年4月～現在に至る 2017年3月～現在に至る 2018年4月～現在に至る

2019年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				

2019年度 研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文)				
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共同研究			
研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個人研究			
研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考

社会における活動等		
団体・委員会等の名称 (内容)	役職名等	任期 期間等

学内における活動等（役職、委員、学生支援など）
教務委員（2019年～現在に至る） 研究推進委員（看護学科/助産別科）（2016年～現在に至る） 周望学舎 シニアサマーカレッジ（2019年 担当科目の一員として参加） 助産別科 クラス副担当 助産別科 助産師国家試験担当/家族計画実施指導員資格認定担当 助産別科 教務担当 助産別科 アドバイザー